

ロング・エンゲージメント

2005(平成17)年3月21日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・原案・脚色＝ジャン＝ピエール・ジュネ／脚本＝ギョーム・ローラン／原作＝セバスチャン・ジャブリゾ／出演＝オドレイ・トトゥ／ギヤスパール・ウリエル／ジェローム・キルシャー／ドニ・ラヴァン／クロヴィス・コルニャック／ドミニク・ベテンフェルド／アンドレ・デュソリエ／ティッキー・オルガド／シャントル・ヌーヴィル／ドミニク・ピノン／ジャン＝ピエール・ダルッサン／ジョディ・フォスター／アルベール・デュボンテル／ジャン＝ピエール・ベッケル／フランソワ・ルヴァンタル／マリオン・コティヤール (ワーナー・ブラザーズ映画配給／2004年フランス映画／133分)

第4章

SHOW・HEY お得意の社会派映画

……セバスチャン・ジャブリゾの『長い日曜日』を原作に、『アメリ』(01年)のスタッフが再結集して、第1次世界大戦中のドイツ・フランスの塹壕戦で死亡した(?)恋人探しを壮大なスケールで描く映画。恋人探しの根拠は、主人公マチルドの「彼は生きている!」という女の直感のみ。5人の兵士の処刑(死亡?)をめぐってのミステリー性は十分だが、多くの登場人物それぞれの役割と、複雑に絡み合い小出し(?)に示される事実関係を理解するのはすごく大変! この映画に限っては事前の学習をお勧めしたい。なお、本来のこの映画のテーマは、女主人公マチルドの女の直感とその執念だから、それもお見逃しなく!

女主人公マチルドはどんな女性?

『アメリ』(01年)で一躍世界の大スターとなったオドレイ・トトゥは、誰が見てもあっと驚くような美人女優ではない(失礼……?)。しかし、アメリ役が最適だったのと同じく、多くはしゃべらないものの、ただ一途に恋人の生存を信じる女性マチルドを演ずるオドレイ・トトゥの演技力がこの映画の大きなポイント。このマチルドという女性は、ひとことでいえば思い込みの激しいヘンな女……? マチルドがそういう性格になったのは、5歳の時に小児マヒにかかり足が不自由となったことと、小さい時に両親を失って叔父さん夫婦に育てられたものの、同

世代の友達がいなかったこと、が大きな要因。

彼女が10歳の時に知り合ったただ1人の男の子が1歳年上のマネク。この時からずっと一緒に遊んできたこの2人は、思春期を迎え大人になると当然のように恋人同士に……。要するに、マチルドは孤独で外界と遮断された中、マネクとの間に存在する(?)テレパシーのような特殊な感性がとぎすまされたヘンな女性というわけだ……。だから、マネクが死刑宣告を受けて塹壕の外で死亡したという通り一遍の報告を聞いても、現実には彼が死ぬところを見た人間がいない以上「死んでいるはずはない!」「マネクに何かあれば、私にはわかるはず」というきわめて自己チュー的な思い込みをしたうえ、その直感だけを根拠に、両親が残してくれた全財産を使ってもマネクの調査に乗り出すという「過激な行動」に出たわけだ。こういう「思い込み」は、ある種の女性によくあるパターンだが、こんな女性が巫女さんになったり、靈感師になったり、さらにはジャンヌ・ダルクになったりするのだから、ある意味恐いし、ある意味すごいもの……。そして、このマチルドの思い込み(=執念?)は果たしてどのような結果に……?

リアルに表現された塹壕戦の恐怖と悲惨さ!

第1次世界大戦におけるドイツ VS フランスの塹壕戦の様子は、ドイツの小説家レマルクの名作『西部戦線異状なし』の中で見事に表現されているが、その恐怖と悲惨さは文字で読むよりはやはり目で見る方がリアル。スティーブン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』(98年)の冒頭の20分間の戦闘シーンもすさまじいものだったが、これは第2次世界大戦における連合軍のノルマンディ上陸作戦での戦闘だから、火器も格段に進歩しており、その攻防戦が凄惨なのは当たり前。しかし、1914~18年の第1次世界大戦は、兵士が1人ずつ銃剣をもって戦うのが基本スタイル(?)だから、お互いに塹壕を掘ってその中に籠もってしまえば長期戦になることは確実。この塹壕から少しでも頭や足を出したら即アウトだ。そして「いざ突撃!」となれば敵の大砲と銃撃的にされるわけだから、ほとんど自殺行為。しかしこんな塹壕の中で何か月も生活していれば、多少気がヘンになるのも当然。したがって、負傷したことを理由に後方に送り返してもらおうと考える不届きモノ(?)が現れても別に不思議ではない……?

ビンゴ・クレピュスキュルとは？

映画の冒頭、雨でぬかるんだ、というより川のようになった塹壕の中を、死刑宣告を受けた5人の兵士が連行されていくシーンが登場する。この塹壕のシーンを見ただけで、戦争の悲惨な様子を一瞬に読みとることができる。この塹壕は、ビンゴ・クレピュスキュルと呼ばれるもので、ドイツと対峙する最前線の塹壕。

ミステリーのテーマは5人の兵士たち

この映画の主人公はもちろんマチルド（オドレイ・トトゥ）だが、ストーリー展開のカギとなるのはそれぞれ次の罪で死刑を宣告された5人の兵士たち。

① マネク／ギヤスパール・ウリエル

マチルドの婚約者：その罪……わざと敵に自分の手を撃たせた

② バストーシュ／ジェローム・キルシャー

家具職人：その罪……故意に自分の指を切断

③ フランシス・ゲニヤール（シ・スー）／ドニ・ラヴァン

溶接工：その罪……銃創に手をあて自ら火傷

④ ブノワ・ノートルダム／クロヴィス・コルニャック

農夫：その罪……自分の手を撃つ

⑤ アンジュ・バシニャーノ／ドミニク・ベテンフェルド

コルシカ人。ティナ（売春婦）のヒモ：その罪……自分で手を撃つ

①のマネクはマチルドの恋人だが、それ以外の4人も当然のことながらそれぞれの過去があり、人間関係があり、曰く因縁がある。彼らが死刑宣告を受けたのは、上記のように過酷な戦場から逃れるべく自らの身体を傷つけた罪によるもの。もっとも、死刑宣告を受けたという設定なのに、その「執行方法」がこの映画ではきわめてあいまいで、現場のボス（？）の命令によって塹壕から放り出されるという無茶苦茶な（？）執行方法がとられているのはちと不可解……？

ビンゴ・クレピュスキュルでの関係者たち

死刑宣告を受けた5人の兵士たちを塹壕の外に放り出した後、彼らの生死に直

接関係する兵士たちは次のとおりだ。すなわち、

- ①ドイツ軍に投降しようとするアンジュを塹壕から射殺するトゥーヴネル伍長
- ②マネクに赤い手袋を渡した、「調達の鬼」と呼ばれ、ビンゴ・クレピュスキュルで起きたいくつかの出来事を知る兵士セレストン・プー
- ③戦場でマネクに会ったという元伍長のエスペランザ
- ④エロディ・ゴルドの夫であったゴルド伍長

複雑で難しい人間関係

この映画はとにかく難しい。そのミステリー解明はとても無理だし、その解明作業についていっただけでもかなり大変。ミステリー解明をこのように難しくさせているのは、何よりも人間関係が複雑で難しいから。そもそも死刑宣告を受けたマネク以外の4人のキャラを把握するだけでも大変だが、彼らの死亡(?)をめぐるミステリー解明のためには、さらにそれぞれの背後にある人間関係や家庭関係に入り込まなければならない。そしてまたビンゴ・クレピュスキュル塹壕の内や外で起こったことに直接関係した兵士たちの行動や証言を理解しなければならない。こりゃ至難のワザ……? そのうえこれはフランス映画だから、なんせ名前がややこしいうえ、顔と名前がすぐに一致しない。したがってちょっと話が複雑になったり、監督の思惑(?)によって、急にあっちからこっちへと話を飛ばされたりすると、たちまち「えーと、彼は誰だったかな……?」というところから考えないとわからなくなってしまう。

ほんとにこの映画のストーリーを理解して自分のものとしたうえで、監督や脚本家の狙いを「なるほど」と感心できるようになるためには、日本人のあなたなら、2、3回観る必要があるのでは……?

難しい小道具の数々

この映画では、死刑宣告を受けた5人の兵士たちの遺品がマチルドのもとに届けられる。しかしそれは単なる遺品や手紙ではなく、そのそれぞれが重要な内容を暗示するものとなっている。つまり暗号なのだ。したがってこれらの遺品や手紙からそこに隠されているミステリーをマチルドが解明していくことは至難のワ

ず。自分の直感を信じているマチルドはそんな難しいミステリーの解明に果敢に挑んでいったが……。さらにこの映画の小道具として重要な役割を果たすのが、マネクが調達の鬼セレスタン・プーからもらってはめていた赤い手袋とマネクが木に刻み込む「MMM」という文字。これは「マネク (M) がマチルド (M) を愛する (Aime)」ことを表す言葉だ。これらの小道具が果たしている役割は、映画全体を見終わってはじめてなるほどわかるもの……？

一見インチキ探偵風だが……？

マチルドのマネク探しを引き受けたのはジェルマン・ピール探偵。ピールが格安の料金でこれを引き受けたのは、自分の娘も足が悪いため、マチルドの足を見てえらく同情したため……。 「イタチより悪賢い」と自らを表現するうえ、フランス流の売り込みが達者(?)な人物だから、一見インチキ探偵では？ と思わせる面もあるが、実際は意外な働きもの！ マチルドの調査が進んだのはホントにこのピール探偵のおかげ。その働きぶりは映画の中でじっくりと……。

いかにもフランス的な弁護士

マチルドを支えるもう1人の人物は事故死したマチルドの両親の保険金請求をやり、マチルドの財産管理をしている弁護士のピエール＝マリー・ルーヴィエール。当然彼は「親からもらった遺産を無駄なことに使うな。ビンゴで起きたことを知ってどうする？」「5人の兵士は今エルドラン墓地に埋葬されている」と常識的かつ最も合理的な判断を下し、マチルドの行動をさとすが、マチルドは聞く耳をもたない。「依頼者教育型」弁護士を自称する私としてはこんな依頼者は困りモノだが、このルーヴィエール弁護士は「依頼者迎合型」なのか、結局マチルドの意見を尊重することに……。この映画の結末を見れば、私のように弁護士の意見を押しつける方式(?)は少し修正した方がいいのかも……？

戦争に翻弄される女・その1 何とあのジョディ・フォスターの登場！

この映画は『アメリ』(01年)のスタッフで固めたフランス映画だが、なぜかこのフランス映画には、戦争に翻弄される女の1人として、ハリウッドの女優優

ジョディ・フォスターが登場する。それも物語のある部分のミステリーを解明していくシーンでのチョイ役(?)として……。彼女はゴールド伍長の妻だったが、子種のない夫の「ある思いつき」によって、夫の親友であり、死刑宣告を受けた5人の兵士の1人であるバスターシュと「子作り」をすることに。もちろん当初彼女は、「絶対嫌!」とそれを拒んだが、コトは意外な方向に展開。さあ大変なことに……?

戦争に翻弄される女・その2

戦争に翻弄される女・その2は、これも死刑宣告を受けた5人のうちの1人であるアンジュをヒモとしていた売春婦のティナ・ロンバルディ。彼女は、自分が愛していたアンジュを無残に死なせてしまった上官に対して残忍な復讐を……。

戦争に翻弄される女・その3

戦争に翻弄される女・その3は、逆に(?)自分の兄を西部戦線の戦いで失ったドイツ人の女性。懸命にマネクを探しているマチルドと偶然レストランで出会ったこの女性は、マネクについての重要な情報をマチルドに伝えてくれた。敵同士の間ながらも、国境を越えた女同士の心の交流がしっとりと描かれており、心暖まるワンシーンだ。

原作はフランスのベストセラー小説

パンフレットによると、この映画の原作はセバスチャン・ジャプリゾの『長い日曜日』。この小説は、1991年秋に出版されるや、たちまちベストセラーとなり、フランスの5大文学賞のひとつアンテラリエ賞も受賞した傑作とのこと。またこのセバスチャン・ジャプリゾという作家は、脚本家としても大活躍で、『さらば友よ』(68年)、『雨の訪問者』(70年)、『狼は天使の匂い』(72年)、『O嬢の物語』(75年)の脚本を書いているばかりか、『続・個人教授』(76年)では監督、原案、脚本までこなしているという天才。もっとも、自分自身の原作の映画化を楽しみにしていたこのセバスチャン・ジャプリゾは、脚本完成の1週間前の2003年3月に亡くなったとのこと。合掌。

2005(平成17)年3月22日記